

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

全体
Q1 稲(いね)づくりは、いつごろからはじめたらいいの？
稲(いね)は、あたたかい気温を好むので、農家で苗(なえ)を育てる場合は、ビニールハウスの中で20～25℃の温度で育てています。バケツ稲(いね)づくりの場合は、気温があたたくくなる5月くらいにはじめるとよいでしょう。じょうぶで健康的な苗(なえ)を育てれば、お米づくりの半分が成功したのと同じ「苗半作(なえはんさく)」という言葉があるほど、発芽(はつが)から苗(なえ)の移しかえまでの時期は大切です。この時期は、日当たりと温度管理には特に気をつけてください。
Q2 真っ白い米と透明(とうめい)の米の違いは？
透明(とうめい)の米は、よく熟(じゅく)したおいしい米です。いろいろな原因で完全に熟(じゅく)しきれない場合に白い米ができます。米粒(こめつぶ)の中心が白くなっているものを「心白米(しんぱくまい)」、芽が出る部分で胚(はい)のふちが白いものは「腹白米(はらじろまい)」、さらに稲(いね)かりが遅(おく)れて、熟(じゅく)しすぎて米粒(こめつぶ)の内部にひびが入ったものが「胴割米(どうわれまい)」などと言われています。白っぽい米は、デンプンの割合(わりあい)が少ないため、食味があまりよくありませんが、全体の20%以下なら食味に問題ありません。
Q3 バケツ稲(いね)を屋上で育てる場合の注意点は？
屋上で育てる場合は、次の点に注意してください。 (1)地上より風が強いので稲(いね)がたおれやすい。 屋上の場合、さえぎるものがなく、強い風にさらされることが多くなります。風の強い日は風よけを置いて稲(いね)を守ってください。 (2)夏に高温になりやすい。 夏の屋上は、強い日差しが当たって高温になりやすいので、稲(いね)の育ち具合に影響(えいきょう)をあたえることがあります。たとえば、バケツの中の水が熱くなりすぎて水がくさることがあるので、お風呂(ふろ)のお湯のようになった場合は水を取りかえてください。特に、夏休みの間は気をつけてください。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q4 ちawan一杯(いっぱい)分のごはんの栄養はどのくらいあるの？

ごはんにはビタミンやミネラル、タンパク質(しつ)などが含(ふく)まれています。ちawan一杯(いっぱい)分のごはんの栄養を身近な食品に置きかえてみると次のようになります。

カルシウム-----プチトマト 約3個分
鉄分-----とうもろこし 約1/3本
ビタミンB-----さやえんどう 約12枚分
ミネラル-----グリーンアスパラガス 約5本分
亜鉛(あえん)やマグネシウム-----ほうれん草 約1/2束分
ビタミンE-----ゴマ小さじ約8杯(はい)分
タンパク質(しつ)-----牛乳(ぎゅうにゅう)コップの約半分

ごはんは、たくさんの種類の栄養が取れるのでとても栄養のバランスの良い食べ物です。ごはんは、パンや麺類(めんるい)よりゆっくりと消化・吸収(きゅうしゅう)されるため、おなかがすきにくくなります。また、ホルモンの分泌(ぶんぴ)がゆるやかで、体脂肪(しぼう)の蓄積(ちくせき)がおさえられるなど、ごはんは太りにくく、健康によい食べ物だと言えます。

Q5 稲(いね)に害をあたえる天候には、何があるの？

台風などの強風で大きな被害(ひがい)が発生します。また、洪水(こうずい)で、田んぼ自体が流されてしまうこともあります。水不足も深刻(しんこく)な被害(ひがい)をもたらします。冷夏ではイモチ病が発生するリスクが高まります。最近では地球温暖化(おんだんか)の影響(えいきょう)で、気温が高くなりすぎて、もみの中身が入らない白い穂(ほ)になるなどの高温障害(しょうがい)が発生しています。

Q6 バケツ稲(いね)と田んぼの稲(いね)の違(ちが)いは？

バケツ稲(いね)を育てる場合は、田んぼと違(ちが)って同じ場所に他の稲(いね)がないので、病気のもとになる菌(きん)がついたり、広がったりすることや、害虫が飛んでくる可能性は田んぼに比べて少なくなります。バケツ稲(いね)は、校庭やおうちのベランダなど、身近なところに置いて移動もできるので毎日の観察にも便利です。

Q7 バケツ稲(いね)で取れるお米の量はどのくらい？

ひとつのバケツに3本ほど苗(なえ)を植えた場合、稲(いね)の育ち具合によっても変わりますが、収穫(しゅうかく)できるお米の粒(つぶ)はおよそ800粒(つぶ)くらいです。ごはん茶わん一杯(ぱい)で、およそ2,400粒(つぶ)くらいのお米が含(ふく)まれているので、バケツ3つくらいで、ちょうど茶わん一杯(ぱい)分くらいになります。

Q8 「バケツ稲(いね)づくりセット」についている米の品種は何？

バケツ稲(いね)づくりセットの種もみの品種は、食味がよい「コシヒカリ」です。現在、日本で最も多く作られている品種です。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q9 学校が休みの日の水管理は、どうしたらいいの？

土、日曜日などお休みをはさむ時の水の管理は、金曜日に水を少し多めに入れておくといいでしょう。ただし、水の深さは苗(なえ)の高さの3分の1のところまでにしてください。水管理以外では、苗(なえ)を育てている時期は、特に「温度」に注意してください。稲(いね)が育つ温度は30℃くらいがちょうどよいため、冷えこみそうな日の前日に室内へ入れるなどの工夫をしてください。夏休みは2、3日に一度の割合(わりあい)で水を足してください。

Q10 農薬はいつごろから使われるようになったの？

江戸(えど)時代には鯨(くじら)から取った油を水田にまき、稲(いね)についている害虫をはらいおとす方法が発明されました。水面にクジラの油を落とすと、水面に油の膜(まく)ができて密封(みっふう)状態になり、水の中にはらいおとされた害虫は呼吸(こきゅう)ができなくなり死んでしまいます。この方法は昭和の初期まで続けられました。また、第2次世界大戦前には可(火)取り先行(専攻)と同じ成分の除虫菊(除虫菊)や、たばこから取れる硫酸(りゅうさん)ニコチンなどを用いた殺虫剤(さっちゅうざい)、銅、石灰硫黄(せっかいいおう)などの殺菌剤(さっきんざい)など天然物由来の農薬が使われていました。第2次世界大戦後、科学技術の進歩により効(き)き目のよい化学合成農薬が開発され、農作業の効率化につながりました。

参考：農林水産省：農薬の歴史：http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tisiki/tisiki.html

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

準備	
Q1	昨年、バケツ稲(いね)づくりで使った土は使えるの？
	昨年の土は使えます。使うときは、土をほぐして前の年の稲(いね)の株(かぶ)が残っていたら取りのぞきます。細かな根はそのまま残しておいても、だいじょうぶです。全体を広げて天日に干(ほ)すことで、土にふくまれる微生物(びせいぶつ)や細菌(さいきん)が空気にふれて活発に動き出します。微生物(びせいぶつ)や細菌(さいきん)は、土の中に残っている根やわらなどを分解して、植物の成長に必要な栄養分にしてくれます。2年目も同じように育てられますが、3年目からは土の中の養分が減少して育ちが悪くなります。土を元気にさせるには土壌(どじょう)活性剤(ざい)などが必要になりますが、手間もかかるため、新しい土を入れ替(か)えた方がよいでしょう。
Q2	どんな種類の土を使えばいいの？
	田んぼの土が一番よいのですが、手に入らなければ、「黒土(くろつち)」を6割(わり)、「赤玉土(あかだまつち)中粒」を3割(わり)、「鹿沼土(かぬまつち)小粒」を1割(わり)の割合(わりあい)で混ぜて使ってください。
Q3	黒土(くろつち)がないときは、どうしたらいいの？
	黒土が販売(はんばい)されていない地域(ちいき)もあるようです。その場合は、田んぼの土として売られている荒木田土(あらきだつち)でもだいじょうぶですが、粘土(ねんど)質が強いので、「赤玉土(中粒)」を2、3割(わり)混ぜてください。培養土(ばいようど)を使う場合は、有機肥料が入っていないものを選んでバケツ稲(いね)づくりセットの肥料で育ててください。有機肥料入りの土は、肥料が乾燥(かんそう)していないと発酵(はっこう)して根(ね)がくさることがあります。黒土はインターネットでも購入(こうにゅう)できます。
Q4	バケツの大きさはどのくらい？
	10～15リットルの大きさと、深さのあるものを使ってください。根は成長していくにつれて下へのびていきます。底が深い方が根の成長を助けて元気な稲(いね)が育ちます。
Q5	ペットボトルや牛乳(ぎゅうにゅう)パックでも育つの？
	ペットボトルや牛乳(ぎゅうにゅう)パックでも育てることはできますが、稲(いね)の成長は容器に入れる土が多いほど元気に育ちます。ですから、バケツとペットボトルでは、バケツの方が稲(いね)が大きく育ちますし、取れるお米の量も多くなります。しっかりした稲(いね)を育ててお米をたくさん取るためには、できるだけ10～15リットルくらいの大きさと深さのある容器を使ってください。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q6 バケツ稲(いね)はどこに置いたらいいの？

日当たりと風通しが良い地面の上が最適です。日当たりの良い屋上でバケツ稲(いね)を育てる場合、風が強い日は稲(いね)がたおれやすくなります。風が強い時は風よけや、支柱を立てて、稲(いね)がたおれるのを防ぐなどの工夫をしてください。また、夏は高温になりやすいため、気温が高い日はバケツの水に手を入れてみて、お風呂(ふろ)のお湯のように熱い時は水をすてて、水道の冷たい水を入れます。他には、バケツの外側全体にアルミホイルを巻(ま)いて、直射(ちよくしゃ)日光を反射(はんしゃ)させて熱を防ぐことができます。コンクリートの上にバケツ稲(いね)を置く場合は、間に木材などの断熱材(だんねつざい)になるものを敷(し)いてください。

Q7 バケツに穴(あな)を開けた方がいいって聞いたけど？

水通しをよくするために、穴(あな)を開けることもあるようですが、その場合は、穴(あな)をふさぐためのふたが必要です。通常、穴(あな)はふさいでおきますが、水がにごる場合や、よごれる場合に穴(あな)のふたを取って水を流し出し、上から新しい水を入れます。また、中干(なかぼ)しや落水(らくすい)の時は穴(あな)のふたを取れば水が抜(ぬ)けていきます。大きな容器の場合には穴(あな)が必要ですが、10～15リットルのバケツの大きさと水を入れかえる時は、バケツをかたむけて水をすてることができるので、穴(あな)は開けなくてもだいじょうぶです。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

芽だし～移しかえ	
Q1 バケツの表面に緑色の藻(も)が出てきたけど、害はある？	アオミドロという藻(も)の一種だと思われます。稲(いね)への害はありませんので、そのままでもいいのですが、アオミドロが土の表面をおおうくらい増えると、土に日光が当たらなくなり、稲(いね)への栄養が少なくなってしまいます。その場合、水と一緒に(いっしょ)に流し出して新しい水を入れてください。
Q2 すべての芽が出てから種まきをするの？	ひとつひとつの種もみの成長には、芽がすぐに出るものや、一週間たっても芽が出ないものなど違(ちが)いがあります。もし芽が出ていないものがあったら、全体の8割の芽が出ていれば、そのまま土に種をまいて様子を見てください。その後は葉が3、4枚に増えたら、茎(くき)が太くて元気な苗(なえ)を4、5本選んで、まとめてバケツの真ん中に植えかえてください。
Q3 一週間たっても芽が出ない。どうしたらいいの？	種もみが芽を出すために必要な温度が低いと芽が出ません。できるだけあたたかい場所に置くか、ぬるま湯に一晩(ひとばん)つけるなどの方法で、芽が出やすいあたたかい環境(かんきょう)を作ってください。また、水の深さは種もみがひたひたになるくらいにして、種もみが空気を取り入れやすい状態(じょうたい)にします。
Q4 油かすを入れたらへんなにおいがする。どうして？	油かすや、十分に発酵(はっこう)していない牛ふんなどを土に加えると、気温が高くなってきたときに悪臭(あくしゅう)が発生することがあります。これは、バケツの中で油かすや牛ふんが発酵しているために起きるものです。このようなときは、土の根をいためることがありますので、水を取りかえる回数を増やします。それでも悪臭(あくしゅう)が消えない場合は、土の根をきずつけない場所にシャベルを垂直(すいちょく)に差(さ)しこみ、土とシャベルの間に隙間(すきま)を作り、そこに勢(いき)よく水を流(なが)しこみます。水がきれいになるまで数か所でおこなってください。
Q5 種をまいた後の水の量はどのくらい？	バケツに種をまいた直後から5cmほど苗(なえ)がのびるまでは、土の表面の窪(くぼ)みに水たまりができる程度の水の量を保ちます。その間、雨が降ってバケツに水がたまらないように、日当たりと風通しの良い屋根のある軒下(のきした)などにバケツを置いてください。また、この時期はスズメが種もみを食べに来ることがありますので、バケツにザルや鳥よけのネットをかぶせて防いでください。苗(なえ)が5cmほどのびてしっかり立つようになれば、ザルやネットを取りはずして水を2、3cmの深さに張(た)って保(たも)ちます。
Q6 肥料がなくてもバケツ稲(いね)は育つの？	肥料がなくても、土に含(ふく)まれている栄養によって、稲(いね)は育ちますが、稲(いね)が元気よく育つためには、はじめから肥料を入れた方がよいでしょう。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q7 葉の先が枯(か)れてきた。どうしたらいいの？

苗(なえ)を移しかえた直後から、周囲の古い葉から枯(か)れはじめます。これは、稲(いね)を大きくするために、最初に育った葉などの栄養を根に送り出して、根を育てはじめるためです。栄養を送り終えた葉や茎(くき)は葉先から自然に枯(か)れていきますが、新しい葉が真ん中から出てきますので心配いりません。他に枯(か)れる原因は稲(いね)の病気です。この場合の枯(か)れ方は、白くなったり、葉の真ん中や全体に茶色や黒のはん点が出ます。しばらく様子を見て、病気の枯(か)れ方をしていたら、もう一度やり直した方がよいでしょう。

Q8 水面が緑色になってきたけど、だいじょうぶなの？

アオミドロという藻(も)の一種だと思われます。稲(いね)への害はありませんので、そのままでもだいじょうぶですが、アオミドロが土の表面をおおうくらい増えると、土に日光が当たらなくなり、稲(いね)への栄養が少なくなってしまいます。その場合、水と一緒に流(なが)し出して新しい水を入れてください。

Q9 苗(なえ)を植えかえるときの本数は何本？

植えかえでまとめる本数は4、5本が最適です。残った苗(なえ)を育てたいときは、別に土とバケツを用意して育ててください。余った苗は、うまく育たなかった時の予備として残すこともできます。

Q10 知らないうちにバケツの中に草が生えてきたけど、なぜ？

自然に、草が生えてくることはよくあります。これは土の中にもともと種が入っていたり、風などで飛んできたりしたことなどが原因です。雑草は稲(いね)の栄養分を吸収(きゆうしゆう)しますので、見つけた時はすぐにぬいてください。ただし、ヒエのように稲(いね)にそっくりな雑草があるので、ぬく時は注意してください。雑草の目安は、茎(くき)元がうっすら赤っぽくなっているものや、茎(くき)の節目に白い産毛がないものです。茎(くき)の節目に白い輪(わ)や産毛があったり、根元に赤みが入らないのは稲(いね)の特徴(とくちょう)です。よく確認(かくにん)してからぬきましょう。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

分けつ～開花	
Q1 なぜ穂(ほ)が開くの？	稲(いね)は穂(ほ)が出ると、ひとつひとつのもみが開いてすぐに花を咲(さ)かせます。稲(いね)の花がさく状態は、穂(ほ)が開くことを言います。穂が開く前に、おしべの花粉は熟(じゅく)していて、穂(ほ)が開くと同時におしべの花粉袋(ふくろ)が割(わ)れて、めしべについて受精します。その時間は晴れた日の午前9時ころから12時くらいまで、その間わずか数十分ほどです。同じ穂(ほ)でも、上と下で花のさく日が違(ちが)うこともあります。晴れていない場合は、午後の3時くらいに花が咲(さ)くこともありますので天候に左右されるようです。穂(ほ)が出たら気をつけて観察してください。
Q2 あきらかに稲(いね)ではない花が咲(さ)いたけれど、どうしたらいいの？	茎(くき)の上部が、いくつか枝分かれしているような形をしていたら、カヤツリ草の仲間です。葉も稲(いね)より細くて数が少ないので、よく観察してください。また、ヒエもカヤツリ草と同じで、よく生えますし、実が出るまでは稲(いね)とそっくりです。ヒエと稲(いね)の見分け方は、茎(くき)の分かれ目で確認(かくにん)できます。稲(いね)は茎(くき)の別れ目に白い輪があり、その周辺に白いうぶ毛のようなものが生えていますが、ヒエにはありません。また、よく見るとヒエの根元の茎(くき)の色は少し赤みがさしていますので、よく観察してぬいてください。
Q3 稲(いね)が大きくなった後でも、中干(なかぼ)しをしてもいいの？	茎(くき)の数が20本ほどあり、稲(いね)の高さが50～60cmであれば、梅雨(つゆ)の晴れ間を見て、2日間くらい中干(なかぼ)しをしてください。ただし、炎天下(えんてんか)の場合は干(ほ)しすぎに注意しましょう。バケツと土の接点にすきまができたら中干(なかぼ)しを終了(しゅうりょう)してください。高さが80cmほどまでのびた場合は、栄養がたくさん必要な穂(ほ)の赤ちゃんが茎(くき)の中に出てくる可能性が高く、水がたくさん必要になります。その場合は、茎(くき)の数が20本に満たなくても中干(なかぼ)しは、しない方が良さそうです。
Q4 分けつ中のバケツ稲(いね)をうまく育てるポイントは？	毎日1回は観察をしてください。ポイントは、中干(なかぼ)し以外は水がなくならないようにすることです。葉の色の濃(こ)さや、しおれていないかどうかを見ることも大切です。また、ウンカやイネアオムシなどの害虫もよく観察して、見つけたらすぐに取りのぞいてください。害虫に、養分をすわれた稲(いね)は成長した段階(だんかい)で急速に枯(か)れはじめます。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q5 苗(なえ)が50cm以上になった。強風でも大丈夫？

夏は、台風の強い風や雨に気をつけてください。台風の日には家の中に入れるのが一番です。バケツ稲を動かさない場合はベランダなどの屋根のある場所で、ベニヤ板やビニールなどで風よけをして、稲(いね)がたおれないようにしましょう。また、支柱をバケツのふちに間を開けて3、4本立てます。支柱を取り囲むようにビニールテープなどを支柱にからめて輪を作り、稲(いね)がたおれるのを防いでください。

Q6 中干(なかぼ)しは必ずしないとイケないの？

中干(なかぼ)しは、土をかかわして、土の中にじゅうぶんな酸素を取りこみ、しっかり根をばらせて、じょうぶな稲(いね)にするためにおこなうものです。茎(くき)が20本に増えて、稲(いね)の高さが40～50cmくらいであれば、中干(なかぼ)しをしてください。80cm以上にのびると、穂(ほ)の赤ちゃんの「幼穂(ようすい)」が出来はじめる時期になり、栄養を取るために水がたくさん必要になります。このような時期に水をすてる中干(なかぼ)しはしない方がよいでしょう。

Q7 いつになったら穂(ほ)が出てくるの？

育てはじめの時期で違(ちが)いますが、8月中旬から9月中旬くらいまでが、穂(ほ)が出る時期です。穂(ほ)がいつごろ出るかを確かめる方法があります。穂(ほ)の赤ちゃん「幼穂(ようすい)」は、少しずつ穂(ほ)の中で成長して、茎(くき)の下から上に向かって増えていき、茎(くき)がふくらみます。その茎(くき)のふくらんでいる場所で穂(ほ)がいつごろ出てくるか予想できます。茎(くき)の下から上にやさしくさわって、下の方がふくらんでいれば、1か月後ほどで穂(ほ)が出ます。茎(くき)の中ほどがふくらんでいたら、あと1、2週間で穂(ほ)が出ます。また、茎(くき)の中の穂(ほ)が大きくなってきた稲(いね)は、根元から葉の先端(せんたん)まで、まっすぐにピンと立ってきます。茎(くき)がふくらんでかたくなっている感じがして、稲(いね)がピンとまっすぐに立っていたら、もうすぐ穂(ほ)が出るサインです。

Q8 台風が来そう！バケツ稲(いね)はどうしたらいいの？

台風がくる前日にはバケツ稲(いね)を校舎や家の中に入れてください。動かさない場合は、ベランダなどの屋根のある場所でベニヤ板やビニールなどで風よけをして、風で稲(いね)がたおれないようにします。また、強風で稲(いね)が折れないように、支柱をバケツのふちに間をあけて3、4本立てます。支柱を取り囲むようにビニールテープなどを支柱にからめて輪を作り、稲(いね)がたおれるのを防いでください。

Q9 風で稲(いね)がたおれた！元にもどせるの？

茎(くき)が折れてたおれてしまった稲(いね)は元にはもどりません。たおれても茎(くき)が折れていなければ、まだ少しは水や栄養を吸(す)い上げる力が残っているかもしれませんから、支柱を立てて稲(いね)を支え、様子を見てください。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q10 同じ大きさのバケツや土なのに、成長が違(ちが)うのはなぜ？

稲(いね)がじょうぶに育つための条件は、「日当たりとよい風通し、必要な量の水と肥料があること」です。ただし、この条件が同じなら、すべて同じように育つということではありません。日の当たり方、水や栄養の取り入れ方など、ほんの少しの違(ちが)いで、その後の稲(いね)の育ち方が大きく変わってきます。また、それぞれの稲(いね)によって、種もみの段階(だんかい)から元気に育つ稲(いね)と、弱い稲(いね)があって、それぞれで育ち方に違(ちが)いができます。

Q11 稲(いね)の花はいつ咲(さ)くの？

稲(いね)は穂(ほ)が出るとすぐに花を咲(さ)かせます。その時間は晴れた日の午前9時ころから12時くらいまでです。稲(いね)の花がさく状態は、穂(ほ)が開くことを言います。穂が開く前に、おしべの花粉は熟(じゅく)していて、穂(ほ)が開くと同時におしべの花粉袋(ふくろ)が割(わ)れて、めしべについて受精します。その間、わずか数十分ほどです。同じ穂(ほ)でも、上と下で花の咲(さ)く日が違(ちが)うこともあります。晴れていない場合は、午後の3時くらいに花が咲(さ)くこともありますので天候に左右されるようです。穂(ほ)が出たら気をつけて観察してください。

Q12 穂(ほ)が出てしばらくたつのに、もみの中は空っぽ。だいじょうぶ？

穂(ほ)が出たばかりのもみの中は空っぽで、1か月半ほどかけて中身がたくわえられていきます。最初のもみの色は緑色で、葉や茎(くき)にたくわえられた栄養であるデンプンが、もみの中に少しずつ送られていきます。デンプンはもみの中で、ミルク状からだんだん固まってお米になっていきます。栄養を送り終えた葉や茎(くき)は、茶色くなって枯(か)れていきます。もみも緑色から茶色になります。もみが茶色にならないで、白くてつやがないような場合は、ニカメイチュウの幼虫(ようちゅう)が茎(くき)の中に入っていることがありますので、白いもみの茎(くき)を一本根元からハサミで切り取って、茎(くき)の中に虫(む)がいないかを確認(かくにん)してください。虫(む)がいた場合は、他の茎(くき)の中にもいる可能性があります。茎(くき)をさわって中(な)がスカスカのようであればその茎(くき)も切り取って、虫(む)がいた場合はすぐに取りのぞいてください。害虫以外で白い穂(ほ)になる原因は、気温(きん)の変化(へん)などがあります。穂(ほ)の赤ちゃんの幼穂(ようすい)ができて始めるころに、気温(きん)の急激(きゅうげき)な低下(げい)や、反対(はんたい)に、台風(たいふう)の影響(えい)で高温(こうん)の風(かぜ)がふいた場合(ばい)も、水分(すいぶん)をうばわれて白い穂(ほ)になることがあります。自然(じぜん)の現象(げんしょう)なのでそのままでもだいじょうぶです。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ&病害虫・⑥出穂～収穫

Q13 稲(いね)みたいなものが生えているけど、抜いてもいいの？

稲(いね)のまわりに生える雑草は、稲(いね)とよく似ているものがあるので、実がなって初めて稲(いね)ではないと気づくことがよくあります。特にヒエは稲(いね)にそっくりです。ヒエは種が最初から土に入っていたり、風で種が飛ばされてきてそのまま育つことがよくあります。雑草かもしれないと思ったら、茎(くき)の節(ふし)の分かれ目を見てください。稲(いね)には白い輪や白い産毛がその周りにありますが、ヒエにはありません。また、成長していくとヒエの茎(くき)の根元は少し赤みがあります。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

スズメ & 病害虫	
Q1	下の方の葉が枯(か)れてきた。病気なのは？
	枯(か)れた葉が、根元に近くて外側の葉なら自然に枯(か)れたものだと考えられます。稲(いね)が穂(ほ)をつける時期になると、それまで葉を育てた栄養を、今度は穂(ほ)を実らせるために使います。そのため、穂(ほ)が実る時期になると、役目を終えた古い葉は、葉の色も薄(うす)くなって自然に枯(か)れていきますが、その分、穂(ほ)が育っていきます。
Q2	茎(くき)が枯(か)れてきたけど、害虫が見つからない。どうしたらいいの？
	日当たり、風通し、土や水、肥料の量など育つ条件がそろって、害虫もいない場合で稲(いね)が枯(か)れる原因は、病気の可能性があります。病気の種類によって枯(か)れ方が違(ちが)いますので、インターネットの画像を検索(けんさく)して当てはまるものを探(さが)してください。葉に白いしま模様(もよう)のすじができて、こよりのように細(こ)くたれさがるのは「縞(しま)葉枯(か)病(びょう) (しまはがれびょう)」、葉・茎(くき)・もみにはん点(あざ)がでる「イモチ病(びょう)、ごま葉枯(か) (はかれ)病(びょう)、墨(すみ)黒(くろ)穂(ほ) (すみくろぼ)病(びょう)」、葉が白(しろ)く枯(か)れる「白(しろ)葉枯(か) (しらはかれ)病(びょう)」、葉の節(ふし)・穂(ほ)首(くび)が黒(くろ)や黒(くろ)茶(ちゃ)色(いろ)になる「イモチ病(びょう)」などがあり、いずれもはん点(あざ)やすじができたり、真(ま)ん中(ちゆう)から枯(か)れてきたり、色が白(しろ)くなるという枯(か)れ方は自然(しぜん)ではありません。稲(いね)の病気(びょうき)は、他の稲(いね)に広(ひろ)がりやすいため、不(ふ)自然(しぜん)な枯(か)れ方(かた)の茎(くき)は切(き)り取(と)って、病(びょう)気が広(ひろ)がらないようにすぐ(すぐ)にすててください。切(き)り取(と)った茎(くき)の中(なか)を見て害(がい)虫(ちゆう)がい(い)ないかも確(た)確認(かくにん)してください。 参考(さんこう)サイト: http://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/info/list.php?sid=1001&DID=175
Q3	稲(いね)の葉(は)に白(しろ)い縦(たて)じまの模(も)様(よう)が(で)てきたけど、病(びょう)気(き)？
	おそらく「白(しろ)葉枯(か) (しらはかれ)病(びょう)」と思います。そのほかに葉(は)の中央(ちゆう)に灰(は)色(いろ) (はいいろ)の大き(おほ)きな楕(だ)円(えん)形(かたち)の病(びょう)状(じょう)が(で)ていたら、「もんがれ病(びょう)」の可(こ)能(に)性(せい)が(あ)ります。葉(は)や、葉(は)が(で)てい(い)る茎(くき)の部(ぶ)分(ぶん)を包(か)んでい(い)る葉(は)鞘(せう) (ようしょう)にも病(びょう)状(じょう)が(で)ます。その時(とき)は、病(びょう)気(き)の葉(は)は切(き)り落(お)として周(しゅう)圍(い)に広(ひろ)がらないようにし(し)ます。近(き)くに他(た)のバケツ(はくせつ)稲(いね)が(あ)る場(ば)合(あ)ひは、移(うつ)らないように他(た)のバケツ(はくせつ)稲(いね)を遠(とほ)ざけ(け)ます。
Q4	バケツ(はくせつ)にボウフラ(ぼうふら)が(わ)いたけど、対(たい)処(しょ)法(ぽう)は？
	ボウフラ(ぼうふら)のい(い)るバケツ(はくせつ)の水(みづ)をすて(す)て、新(あたら)しい水(みづ)を入(い)れてく(く)ださい。そ(そ)の他(た)、数(た)滴(てき)の食(じゆう)用(よう)油(あぶら)を水(みづ)面(めん)にた(た)らして油(あぶら)の膜(まく)をつ(つ)くり、ボウフラ(ぼうふら)の動(うご)きを止(と)める方(かた)法(ぽう)もあ(あ)りますが、水(みづ)を(か)え(か)える方(かた)法(ぽう)が確(た)実(じつ)です。
Q5	マンシ(まん)ョン(おん)の11階(じゅういちがい)の高(たか)い所(ところ)でも鳥(とり)や害(がい)虫(ちゆう)は稲(いね)を食(く)べに(き)るの(の)？
	マンシ(まん)ョン(おん)の11階(じゅういちがい)でも鳥(とり)や害(がい)虫(ちゆう)はや(や)ってき(き)ます。鳥(とり)よけ(よけ)には、約(やく)1～1.5cm角(かく)くら(くら)いの細(こ)かい網(あ)みめ(め)の網(あ)みめ(め)の網(あ)みめ(め)を、稲(いね)の周(しゅう)りに少(すく)し間(ま)を空(あ)けて隙(すき)間(ま) (すきま)のな(な)いよう(よう)にか(か)ぶ(ぶ)せ(せ)ます。(細(こ)か(か)すぎ(すぎ)る網(あ)みめ(め)は、風(かぜ)通(とお)し(し)が悪(わる)く、湿(し)気(き) (しつ)け)が(は)生(は)生(せい)して病(びょう)気(き)の発(はっ)生(せい)率(りつ)が高(たか)くな(な)ります。)害(がい)虫(ちゆう)は、こまめ(め)な観(くわん)察(さつ)を(し)て見(み)つ(つ)けたら取(と)り(の)ぞい(ぞい)てく(く)ださい。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q6 スズメから稲(いね)を守る方法は？

スズメは、種もみの中身を食べに来ますので、種まきをした直後から苗(なえ)が5cmほどに成長するまでと、穂(ほ)が出てからの時期に飛んできます。被害(ひがい)を防ぐには、JAやホームセンターなどで売っている鳥よけのネットをかぶせます。穂(ほ)が出たらバケツ稲(いね)から少しはなれた場所に支柱をブロックなどで支えて立て、穂(ほ)から数十cm上の高さにして、全体に隙間(すきま)のないようにかぶせます。ネットはじょうぶで日当たりと風通しが悪くならないように、1～1.5cm角程度のスズメが入れないほどの細かい網目(あみめ)を選んでください。

Q7 病気にはどんな種類があるの？

シマハガレ病…葉に白いしま模様(もよう)のすじができる
イモチ病 …葉や茎(くき)、穂(ほ)にはん点(はんてん)がでて楕円(だえん)形に広がる
ゴマハガレ病…葉のさやにごまのような茶色(ちいさ)いはん点(はんてん)が出る
シラハガレ病…葉が白く枯(か)れる
モンガレ病 …茎(くき)の節(ふし)が黒くなる
などがあります。いずれも、葉先(はのしん)から茶色(ちいさ)くなって枯(か)れていくような、自然(しぜん)の枯(か)れ方(かた)ではありません。

Q8 病気になったらどうしたらいいの？

稲(いね)の病気(びょうき)はいろいろありますが、代表的(ていせき)なもの(もの)は「イモチ病(びょうびょう)」です。葉(は)に茶色(ちいさ)っぽいはん点(はんてん)が出る病気(びょうき)です。とても広(ひろ)がりやすい病気(びょうき)なので注意(ちゅうい)が必要です。他のバケツ(ばけつ)に病気(びょうき)を広(ひろ)げないため見(み)つけたら、すぐ(すぐ)に他のバケツ(ばけつ)とはなして置(お)いてください。はん点(はんてん)のある場所(ばしょ)は切(き)り取(と)ってすててください。

Q9 稲にはどんな虫(むし)が付きやすいの？

キリウジガガンボ…種もみの中身(なかつみ)や根(ね)を食べる
イネミズゾウムシ…根(ね)を食べる
ウンカ、ヨコバイ…茎(くき)や葉(は)に付(つ)くことが多く(おおい)、葉(は)や茎(くき)を食べ(た)る、養分(やうぶん)を吸(す)う
ニカメイチュウ(ニカメイガの幼虫(ようちゆう))…茎(くき)の中(なか)から食(た)べていくため、茎(くき)の中(なか)は空(くう)になり、穂(ほ)が出(で)ても白(しろ)い穂(ほ)になる
ウンカ類(るい)…稲(いね)の汁(じゅう)を吸(す)うため、稲(いね)全(ぜん)体(たい)の色(いろ)がぬけて枯(か)れる、穂(ほ)が白(しろ)くなったり出(で)なくなる
イネクロカメムシ…稲(いね)の汁(じゅう)を吸(す)い、白(しろ)く枯(か)らす
イネアオムシやアワヨトウ…葉(は)を食べ(た)るため、葉(は)がギザギザになる
イネクロカメムシなどカメムシ類(るい)…穂(ほ)に針(はり)を刺(さ)して中(なか)の養分(やうぶん)を吸(す)い、吸(す)った穴(あな)に細菌(さいきん)が付き、その部(ぶ)分(ぶん)が黒(くろ)くなる
病害虫(びやうびょうむし)で被害(ひがい)にあ(あ)った稲(いね)は、食(た)べても人(ひと)間(かん)に害(がい)はあ(あ)りませんが、見(み)た目(め)が良(よ)くないため、脱(だっ)こく(こく)の時(とき)に取(と)りのぞいた方(かた)が良(よ)いでしょう。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q10 虫を見つけたらどうしたらいいの？

稲(いね)の葉や茎(くき)にいる虫を見つけたらすぐに取りのぞいてください。かくれていることもあるので、葉のうらがわ・バケツのうらがわもよく見てください。苗(なえ)を植えて1か月以内に株(かぶ)ごとたおれた時は、根を食べるイネミズゾウムシの幼虫(ようちゅう)がいるので、土を堀(ほ)り起こして白い幼虫(ようちゅう)を取りのぞいてください。ウンカは、バケツの水面に少しだけ食用油をたらして、そこに落として溺(おぼ)れさせます。カメムシは、稲(いね)の近くでペニーロイヤルミントをならべて育てると匂(にお)いを嫌(きら)って寄りつかなくなります。カメムシは危険(きけん)を察知(さつち)すると悪臭(あくしゅう)を放ちますので要注意です。ティッシュをかぶせたり、ガムテープで取るなどで、つかまえたらずばやく新聞紙などにくるみビニール袋(ふくろ)で密封(みつふう)してすててください。

Q11 「かかし」の作り方を教えて？

「かかし」は鳥をおどして、近づかないようにするのが目的です。鳥がこわがる人間や動物の形を作ります。人間の形にするには、おとなの身長と同じくらいの高さの竹と、手を広げたくらいの長さの竹を十文字に組んで人間の体の部分を作ります。上には頭の形のように丸めたわらや布(ぬの)などをつけて帽子(ぼうし)をかぶせます。十文字に組んだ竹に、古着を通してかかしの完成です。稲(いね)の近くに、かかしがたおれないように、足になる部分を土の中にしっかりと支え、稲(いね)の近くに立てておきます。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

出穂～収穫	
Q1	かり取った稲(いね)から生えてきた草は何？
	かりとった稲(いね)の切り口からのびてくる苗(なえ)を「ひこばえ」と言います。かり取っても根は生きているので、また稲(いね)が育ってきます。他の植物でも切った草木の根や株(かぶ)から同じように芽が出ることがあります。
Q2	収穫(しゅうかく)したお米が少ない場合、どうやってごはんを炊(た)けばいいの？
	ひとつのバケツ稲(いね)のできるお米の量は、ごはんちやわんに3分の1ほどです。バケツ稲(いね)で取れた少量のお米でも、いつものお米と一緒に炊飯(すいはん)器でたく方法をご紹介します(しょうかい)します。 1. 炊飯(すいはん)器にいつもたく量のお米とお水を入れます。 2. 湯のみちやわんか、同じくらいの大きさ、形の耐熱(たいねつ)の器にバケツ稲(いね)のお米を入れて、お米の1.2倍のお水を入れます。 3. 1.の炊飯(すいはん)器の中に2.の湯のみちやわんを入れてふたをして、いつものようにたき上げます。この方法は、ごはんとおかゆ、白米と玄米(げんまい)、白米とませごはんなど、一度に2種類のごはんがたけます。家族の1人が体調をくずして、おかゆをたこうと思った時などには、とても便利です。くわしくはJAグループのホームページ「身近な食や農を学ぶコーナー」⇒「お米づくりに挑戦(やってみよう！バケツ稲(いね)づくり)」の「ヒントとコラム」⇒「2.お米を使った料理」をクリックすると画像でも見られます。 https://life.ja-group.jp/education/bucket/column/recipe02
Q3	穂(ほ)に黒い点がつく病気は何？それがついても米は食べられるの？
	穂(ほ)の黒い点は、カメムシに吸(す)われた後に空気がふれることで、そこに細菌(さいきん)がついてカビが発生し、黒くなります。もみすりをした後の玄米(げんまい)にも黒い点が見られます。病気では穂(ほ)イモチ病などです。穂(ほ)イモチ病の症状(しょうじょう)がある時点で、すでに茎(くき)や葉もイモチ病にかかっています。食べても害はありませんが、味や見た目が悪いので、脱(だっ)こくの時に取りのぞいた方がよいでしょう。
Q4	もみがらはどんなものに利用できるの？
	もみがらは、焼いて黒く炭化させた燻炭(くんとん)にして苗代(なわしろ)の保温材にしたり、牛・豚(ぶた)・馬・にわたりの寝床(ねどこ)として使います。また、堆肥(たいひ)の材料になります。まくらの中のつめ物、くだもの箱などのクッション材、保温材などにも使われています。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q5 すり鉢(ばち)と軟式(なんしき)ボール以外で簡単(かんたん)なもみすりの方法は？

臼(うす)と杵(きね)を使って、もみすりと精米を同時にする方法もあります。昔の方法ですが、時間もかかり体力も必要です。インターネットで小型もみすり器が6,000円くらいで売られているようですが、使ってみるとかなり時間がかかります。お金をかけない方法であれば、やはり、すり鉢(ばち)と野球の軟式(なんしき)ボールを使う方法になります。コツが分かれば意外とすなりもみは外れます。すり上げるコツは、すり鉢(ばち)に一つまみの少量のもみを入れて、すり鉢(ばち)の側面を使ってゴリゴリと下から上にすり上げていきます。すり鉢(ばち)の代わりにザルでもできます。

Q6 昔の精米(せいまい)方法は？

今から500年ほど前までは、かり取った穂(ほ)から、もみをそぎ落とし、その後、臼(うす)中に入れて杵(きね)でついていました。もみどうしがこすれ合うことでもみがらがはがれ、今のように真っ白にはなりません。もみすりと精米(せいまい)が同時にできました。150年前になると、「唐臼(からうす)」といって、足を使った精米機(せいまいき)が発明されました。手で杵(きね)をつくより、力がいらす楽に精米(せいまい)できるようになったそうです。その後はどんどん発明が進み、人力ではなくモーターを動力とする現在の精米機になりました。

Q7 稲(いね)の収穫(しゅうかく)後に干(ほ)すのはなぜ？

収穫(しゅうかく)直後のもみの水分は20～25%あります。このままだと水分が多すぎて、米が変質してしまいます。そのため、水分が15%程度になるまで乾燥(かんそう)させ、保存(ほぞん)できるようにします。おおよそ10日くらいの乾燥(かんそう)が必要です。簡単(かんたん)な乾燥(かんそう)方法は、かり取った稲(いね)の根元をひもでくくり、逆(さか)さまにして雨の当たらない屋根のある風通しの良い場所につるしてください。

Q8 もみすり後の米の中にある緑色の米があるのはなぜ？

稲(いね)の成長にも差があるので、全ての穂(ほ)が同時には出ずに順番に出てきます。多くの穂(ほ)は出る時期の差がありませんが、たくさん実らすために、いつまでも穂(ほ)は出てきます。最初に出そろった穂(ほ)が茶色くなり、収穫(しゅうかく)する時に出てきた穂(ほ)は、これから成長していくため、まだ緑色をしています。収穫(しゅうかく)の時には、茶色の穂(ほ)も緑色の穂(ほ)も一緒(いっしょ)にかり取るために、もみすり後の米の中に緑色の米が混ざります。また、同じ1本の穂(ほ)でも、もみの花の咲(さ)く時期が違(ちが)うことがあり、後から花を咲(さ)かせたもみも成長がおくれて緑色の米になります。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q9 風でたおれた稲は元に戻(もど)るの？

稲(いね)は、弱い風ではたおれませんが、台風のような強い風の場合はたおれることがあります。ぼっきり折れていなければ、もとに戻(もど)り、持ち直す場合があります。その時は、支柱(しちゆう)を立てて支えて下さい。成長途中(とちゆう)の若々(わかわか)しい稲(いね)の方が持ち直す可能性が高いです。収穫(しゆかく)直前の稲(いね)は、実(み)った米(こめ)の重み(おも)で穂(ほ)がたれてくるので、その分、たおれやすくなっています。たおれた稲(いね)は、そのままにしておく、くさる場合がありますので、熟(じゆく)す期間(きかん)が少し短(みじ)くてもかり取(と)ってください。

Q10 9月5日に穂(ほ)が出ました。いつかり取(と)ったらいいの？

収穫(しゆうかく)の時期(じき)は、穂(ほ)が出てから35～45日後(ご)くらいです。8～9割(わり)のもみが黄金色(おうごんいろ)になったころが目安(めやす)です。9月5日に穂(ほ)が出た場合、10月の始め(はじめ)から中旬(じゅん)が収穫(しゆうかく)の時期(じき)になります。かり取り(かりとり)の10日(じゅうにっぴ)くらい前から、落水(らくすい)といって、水をすてて土(つち)をかわかす作業(さぎょう)をします。気温(きんぱん)が22～25℃(じゅうに)くらいの日(ひ)にかり取(と)るとお米(こめ)の味(あじ)がよくなります。かり取(と)った稲(いね)は、根元(ねもと)をひも(ひも)でくくり、穂(ほ)を下(した)にして、風通(かぜとお)しがよく雨(あめ)があたらない場所(ばしょ)につるして、10日(じゅうにっぴ)くらいかわかします。

Q11 実(み)った穂(ほ)が雨(あめ)にぬれてもだいじょうぶ？

収穫前(しゆうかくまえ)であれば、多少(たうしやう)ぬれてもだいじょうぶです。稲(いね)に緑(きよ)の葉(は)が残(のこ)っている時は生(なま)きている状態(じょうたい)なので、水(みづ)がかかってもくさることはありません。ただし、収穫(しゆうかく)後(ご)や、熟(じゆく)した穂(ほ)は、枯(か)れたもの(もの)に近い(ちか)い同(おな)じ状態(じょうたい)になるので、ぬれたまま(まま)放(はな)しておく(おく)とくさ(くさ)ってしま(しま)います。もし、収穫(しゆうかく)する直前(じきまへ)に、雨(あめ)で穂(ほ)がぬれ(ぬ)れてしま(しま)ったら、2～3日(にっぴ)そのまま(まま)かわか(かわ)してから(から)収穫(しゆうかく)し(し)てください。

Q12 穂(ほ)が白(しろ)くて、中身(なかみ)がない。なぜ？

稲穂(いなほ)全体(ぜんたい)が白(しろ)くなり、中身(なかみ)が入(い)らない状態(じょうたい)を、「白穂(しらほ)」とい(い)います。あたたかい風(かぜ)が強(つよ)く当(あ)たり過(あ)ぎたり、天候(てんこう)が悪(わる)かったりすると、自然(しぜん)に枯(か)れて、白穂(しらほ)にな(な)ったりする場(ば)合(あ)いがあります。また、ニカメイチュウ(ニカメイチュウ)が原因(げんいん)の場(ば)合(あ)いもあります。幼虫(ようちゆう)のころ(ころ)に茎(くき)の中(なか)に住(す)んで稲(いね)を食(く)べます。白(しろ)くな(な)った稲穂(いなほ)は茎(くき)の根元(ねもと)から切(き)り取(と)って、茎(くき)の中(なか)に虫(むし)がい(い)ないか(か)を確(た)認(にん)し(し)てください。また、成(せい)長(ちやう)不(ふ)良(りやう)で穂(ほ)に栄(えい)養(やう)がい(い)かない場(ば)合(あ)いも白(しろ)くな(な)ったり、中身(なかみ)がな(な)くな(な)ったりする場(ば)合(あ)いがあります。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q13 肥料として油かすを入れたら水がくさくなったけど、においを取る方法はあるの？

バケツの水は循環(じゅんかん)していないため、特に気温が高いと水が熱くなり、油かすが発酵(はっこう)してくさくなることがあります。においがなくなるまで、何回か水を入れかえて下さい。油かすもそうですが、じゅうぶんに発酵(はっこう)していない牛ふんも同じです。このような時は、根をいためることがありますので、水を入れかえる回数を増やします。それでもにおいが消えない場合は、根を傷(きず)つけないような場所に、シャベルを土に垂直(すいちよく)に差しこんで、土とシャベルの隙間(すきま)に勢いよく水を流しこみます。水がきれいになるまで数か所おこなってください。

Q14 穂(ほ)がでたあとの、バケツの水はどう管理すればいいの？

穂(ほ)が出た後も水はたつぷりと入れておきます。もみの中身がしっかりと入ってくるともみが重くなり穂(ほ)がたれてきます。穂(ほ)が下がり始めたら、深さ3cmくらいの水を保(たも)ちます。

Q15 なかなか穂(ほ)が出ないのは、なぜ？

天候によって穂(ほ)がなかなか出ない場合があります。異常(いじょう)気象で、くもりの日が続いた後に記録的な猛暑(もうしょ)になるなど、急激(きゅうげき)な天候の変化でストレスを受けると、稲(いね)の体力が落ちて、穂(ほ)の成長がおくれる可能性があります。それでも9月中に穂(ほ)が出れば、問題はありませので、もうしばらく様子を見てください。

Q16 稲(いね)かりはいつごろすればいいの？

稲(いね)かりの目安は穂(ほ)が出てから35～45日後です。8月下旬(げじゅん)に穂(ほ)が出たら、かり取るのは10月初めくらいが目安ですが、通常は見た目ですべての時期を判断します。穂(ほ)が頭を深くたれ、緑色の部分が下の方に少し残るくらいで、8割(わり)ほどが黄金色になったら水をすてて、稲(いね)を10日間ほどかわかしてから収穫(しゅうかく)してください。

Q17 なぜ稲(いね)かり前は水をやらないの？

収穫(しゅうかく)の前に水をすてて稲(いね)をかわかす理由は、実ったお米の水分量を調節して、味を良くし、長い期間の保存(ほぞん)ができるようにするためです。お米の水分が多いと、くさりやすくなります。長く保存(ほぞん)もできて、おいしいお米の水分量は15%です。田んぼの水をすてて土と稲(いね)をかわかすのは、収穫(しゅうかく)のときに土がかわいて歩きやすくなり、稲(いね)もかわくのでかり取りやすくなるからです。収穫(しゅうかく)した時のお米の水分量は20～25%なので、15%に近づけるためにさらに穂(ほ)を下にして、稲(いね)をかわかします。また、脱(だっ)こく、もみすり、精米をしたときにも作業がしやすい硬(かた)さになります。バケツ稲(いね)づくりの作業は、田んぼの作業を小さなバケツで再現しています。作業もしやすく、味もおいしく、保存(ほぞん)食にもなる水分の量を探(さぐ)り当てた昔の人の知恵(ちえ)はすごいですね。

※JAグループHP上の「よくあるご質問」

①全体・②準備・③芽だし～移しかえ・④分けつ～開花・⑤スズメ & 病害虫・⑥出穂～収穫

Q18 収穫したもみの中が空っぽ。どうして？

穂(ほ)に実が入らない原因はいろいろあります。気温や、天候による自然な現象や、稲(いね)の病気、害虫によるものがあります。害虫の場合は、ニカメイガの幼虫(ようちゅう)のニカメイチュウが茎(くき)の節(ふし)のあたりから入って、茎(くき)の中で稲(いね)の養分を吸い取ってしまい、穂(ほ)に栄養がいかなくなります。その他、シラハガレ病、イモチ病など病気が原因で稲(いね)が枯(か)れて、栄養が穂(ほ)に送られないなどがあります。

Q19 わらは何に使うの？

昔の人は、わらでいろいろなものを作って生活に役立てていました。代表的なものをあげてみます。

1. みの…レインコート
2. なわ…物をしばる道具
3. わらじ…くつ
4. 雪(ゆき)ぐつ…長ぐつ
5. たたみ、ござ、むしろ…ゆか、地面などにしくもの
6. 納豆(なっとう)の藁(わら)苞(づと)…納豆(なっとう)づくりの道具。わらについた菌(きん)で納豆(なっとう)ができる
7. わらの灰(はい)…肥料や、火(か)ばちに入れて炭(すす)を長持ちさせ、周囲を温める
8. 牛(うし)・豚(ぶた)などの家畜(かちく)のベッド
10. お正月のしめかざり
11. 田んぼや畑の肥料

わらは、生活のさまざまなところで活躍(かつやく)してきました。